
I S 転生の翼

御坂弟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生の翼

【Nコード】

N8657X

【作者名】

御坂弟

【あらすじ】

神の手違いで死んだ俺は神から転生させてもらえる事になった。

文章力が無いですが宜しくお願いします。

プロローグ（前書き）

あまり小説を書いた経験が無いのでへたくそですが宜しく願います。

ブログ

とある日の夕方

「ふう、やっと新作のプラモが買えたぜ。」

「さっさと帰って作り始めるか。」

俺は最近出た新作のプラモが買えて調子にのっていた

そんな俺の視界に横断歩道の上で座っている猫が入った
そしてそのすぐ近くまで車が迫っていた

「なっ！アブねえ！」

俺はとっさに猫に走りより、横断歩道の向こうまで投げ飛ばした

ドンっ！

猫を投げ飛ばした俺は猫の代わりに車にはねられた、
そして徐々に視界が薄れて行く中、思った

『せめて、これを作りたかったな。』

そして俺の視界は真っ暗になった

プロローグ（後書き）

ぜひ次も宜しくお願いします。

神様（前書き）

連続投稿です。

神様

俺は目が覚めると一面真っ白な部屋だった

「なんだここ、心理の扉でもありそうだな。」

『そんなものは無いよ』

「うわあっ！何時からいたんだよ。」

俺の後ろにいかにも神ですみたいな人がいた

『みたいなじや無くて本物だよ。』

「ええっと、俺死にましたよね？」

『ええ、あなたは猫をかばって死にました、しかしその猫が私の親友のペットだったのです。』

それで彼がキミを転生させてほしいと言ってまして、あなたが行きたい世界に転生させることになったのです。』

「マジですか？」

『マジです。』

「どこでもいいの？」

『はい、どこでも良いです。』

「じゃあ、ISの世界が良いです。」

『ええっと、体などはどうします?』

「じゃあ、体はhackのハセヲで身体能力は最高まで、ISは俺の知ってるガンダムの機体で。」

『わかりました、それではあなたを原作開始の少し前に落とします。』

「え?落とす?」

『はい、落とします』

神様がそういうと俺の下の地面に穴が開いた

「そういうことかぁーーーー!!」

案の定俺は暗闇に落下した

神様（後書き）

次回は早めに更新します。

主人公設定（前書き）

今回は主人公設定です。

主人公設定

名前 神杉来斗

見た目 h a c k のハセヲ似

年齢 17 歳

好きなもの プラモ、本、甘いもの

嫌いなもの 他人を見下す人間、コーヒー

使用機体 ヴァリアス

主人公説明

他人を見下す人間が嫌い、基本的にそれ以外の人には優しい。

神に転生させられた後、篠ノ之束の隠れ家の近くに落下、突然現れたのと

束の作っていないコアを持ったISを持っているということに気が入られる。

その後束の頼みでIS学園に行くことになる

機体説明

ヴァリアス

来斗の記憶にある、ガンダムに出てきた機体がベースで出来る
その場の状況によって好きな機体を選ぶ
しかし、強力すぎる武器にはリミッターがかけられ、機体にも
リミッターをかけている。

篠ノ之 束（前書き）

全然束のキャラがわからない。
かなり束のキャラが違うかもしれませんがご了承ください。

篠ノ之 東

暗闇の中で一人の女性がキーボードを動かしていた

『ん、なんだろ、この反応は、ISのコアにしては少し違うな、しかも突然現れたし。』

女性はウサミミをつけていて、目の下にはクマが出来ていた。

『すぐ近くだし、少しだけみてみようか。』

女性はそついうと暗闇から出て行った

来斗は今気絶している、神に落とされた後、比較的低い所から出てきたのだが、
打ち所が悪く、気絶してしまったのだ

『おおーい、きみ、起きなよ。』

「う、ううん？あんな誰？」

『そついう時はそつちから名乗るものだと思うけど。』

「ああ、すいません、俺は神杉来斗です。」

『じゃあ、らーくんだね、私は天才の篠ノ之束さんだよー。』

（らーくんってなんだよ、ていうかいきなり束さんに遭うってどうよ。）

束「そういえば、らーくんのそれ、IS?」

束の視線の先は俺の人差し指の指輪

「たぶんそうだと思います。」

束「たぶんって言うのも気になるけど、もしかしてらーくん動かせるの?」

「はい、操縦はよくわかりませんが。」

束「誰が作ったの?」

（ああ、どうしよう、神が創りましたなんていえないし。）

『来斗さん、来斗さん。』

（あれ? 神様?）

『はい、いまあなたの状況を見ていましたが、今の貴方の体は全てがオーバースペックですが

それは知能の良さも例外じゃありません、今の貴方は篠ノ之束と同じくらい良いので

ISくらいなら作れるので、自分で作ったと言ってください。』

（ああ、わかった。）

「自分で作りました、前にちょっと実物を見たら意外に作れそうだったから作りました。」

束「ええ〜！？ほんとに？らーくんもすごい天才だねえ。」

「そうでもないです、所で、しばらくの間泊めてくれませんか？家が無くて。」

束「だったらIS学園に行ったら？あそこなら男性のIS操縦者だって言えば入れるよ
それまでの間はここにいて良いけど。」

「じゃあ、そこに行って見ます。後少しコイツを弄りたいんですけど。」

人差し指のヴァリアスを指差す

束「じゃあ、この束さんの研究所を使うと良いよ。
天才の研究所だからね、ほとんどの物が作れるよ。」

「ありがとうございます。じゃあよろしく願いします。」

束「じゃあ、研究所に行こうか。」

「あれ、でも見当たらないですよ？」

束「この束さんが普通の所に作るわけじゃないか。ポチツとな」

束がスイッチを押すと地面がスライドして階段が現れた

束「じゃあいこうか。」

「はい。」

そういえば機体は何を使おうか。

原作開始まで二ヶ月程度あるしじっくり考えるか。

篠ノ之 束（後書き）

ほんとにセシリア戦辺りどの機体を使いましょうか。

福音辺りの機体は考え付くんですがね。

IS学園（前書き）

遅くなつてすいません、バカテスのほうも明日、明後日には投稿します。

IS学園

俺はあの後研究所でヴァリアスを調べてみたけど

本当にガンダムに出てくる機体になれる様になっていた

後はほかの機体の武装も使える様になっていた位かな

それと操縦の練習もしてみたら、何故かすぐ理解できてかなり上達した。

たぶん、神様が気を利かせてくれたんだろう、

後サポート用にハロを作ってみたら、東さんが気に入って欲しいと
いうので

ミニサイズのハロを作ってあげた。

そのお礼と言って、バイクを作って貰った

そしてすぐに二ヶ月が過ぎ学園に行く日が来た

「それじゃあ、ありがとうございました。」

東「うん、何か用があったら電話してね。」

うん、やっぱり原作みたいに興味を持った人には優しいみたいだ。

俺は束さん特製のバイクを使いIS学園に向かった

IS学園

そして俺はIS学園に着いた

聞いた話だと迎えの教師がいるらしいけど。

？「すまない、少し遅れてしまった。」

「いえ、今来たばかりです。」

千「そうか、私がお前のいくクラスの担任の織斑千冬だ。」

おお、やっぱりすごいオーラが出てる

「神杉来斗です。」

千「すぐに入学式が始まる、移動するぞ。」

「はい。」

暇な入学式は寝て過ごし、今は自己紹介のじかんだ

山「それじゃあ、出席番号順に自己紹介をしてください。」

この人が山田先生か、やっぱり小動物系だな、背は小さいのに胸だけはでかい

そして順番に自己紹介している中、寝ている奴が一人、

あれが一夏か、山田先生が起こしてるのに中々起きない。

おっ立ち上がった、

一「えー・・・、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

えっと・・・終わりじゃないよな。

一「以上です。」

おいおい、マジかよ、何人かずつこけてたぞ

すると千冬さんが教室に入ってきて、一夏の頭を出席簿で殴った。

『スパァン』

あれ出席簿の音じゃねえぞ、下手したら死ぬ

一「げえっ、関羽!？」

いやいや、もう人間ですらない、サーヴァントじゃねえの？
だとしたらセイバーかな。

『ガッ』

「危ないじゃないですか。」

千「チッ、余計な事を考えるからだ。」

今の音は出席簿をナイフで防いだ音だ

ていうか今舌打ちしたよな！？

それに何で分かったんだ？

山「織斑先生、会議は終わってたんですか？」

千「ああ、クラスの挨拶を押し付けて悪かったな。」

山「いえ、副担任ですしこれ位しませんと。」

どうやら織斑先生が自己紹介をするみたいだ、

千「諸君、私の役目は君たち新人を一年で使い物になるまで育てる事だ。

私の言うことはしっかり聞き、理解しろ。逆らってもいいが、言う事は聞け、いいな

ん？なんか嫌な予感

その瞬間

『キャーーーーー!!』

黄色い声援が響いた。

う、うるさっ、

くそ、忘れてた

まだ何か行つてやがる。

千「以上でSHRは終わりだ、諸君らには半月で基礎知識を覚えて貰う。

その後基本動作を半月で覚えろ。いいか、いいなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ、いいな!」

『は、はい!』

ふう、やっと終わった、

一夏と話で見えるかと思い、一夏の席に向かおうとしたら、ポニーテールの少女

篠ノ之箒につれていかれてしまった

はあ、しょうがない次の時間にするか

そして二時間目

—「ほとんど全部分かりません」

一夏がぼけていた、だっておかしいだろ、
何で電話帳と間違えるんだよ。

とそんな事がありながら二時間目が終わった。

そして一夏が話しかけてきた

—「よう、俺は織斑一夏、同じ男同士仲良くやろっぜ。」

「ああ、俺は神杉来斗、来斗って呼んでくれ。」

—「ああ、宜しくな、来斗。」

？「ちょっとよろしくて？」

—「ん？」

「ああ？」

？「まあ、なんですの、そのお返事。このわたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでから
それ相応の態度というものがあるではないかしら？」

「・・・・・・・・・・」

うん、こついうのは相変わらず苦手だ、一夏も同じなようだ

—「悪いな、俺君が誰か知らないし。」

セ「私を知らない？イギリス代表候補生にして入試主席のセシリア・オルコットを？」

―「質問いいか？」

セ「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですね。よろしくてよ。」

―「代表候補生ってなに？」

『『がたたっ』』

おいおい、また何人かずつこけたぞ。

「おい、マジで知らないのか？」

―「おう、知らん。」

セ「信じられせんわ、極東の島国と言うのは、こつまで未開の地なのかしら。常識ですわよ。」

「一夏、代表候補生って言うのは国家代表IS操縦者の候補生ってことだ。」

―「確かにそんな感じの名前だな。」

セ「そう、エリートなのですわ！」

セ「本来ならわたくしのような人間とクラスを同じくするだけでも

幸運なのよ。おわかり？」

「そうか。それはラッキーだ。」

セ「・・・バカにしていますの？」

セ「大体、貴方たちISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。」

一「俺に何か機体されても困るんだが。」

「お前の方がバカだろ、俺よりISに詳しいのなんて東さんくらいだぜ。」

セ「なにを言ってますの、そんな訳ありませんわ。」

「まあ、信じるも信じないもお前しだいだ。」

キンコーンカーンコーン

セ「また後できますわ、逃げないことね！よくって!？」

また来るのかよ、めんどくさい

千「さて、この時間はまず再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。」

うわ、めんどくさいな。

『はいはい、織斑君を推薦します。』

—「えっ、おれ!？」

ドンマイー夏

『じゃあ、私は来斗君を推薦します。』

千「では候補者は織斑と神杉でいいか？」

—「ちょ、ちょっと待った俺はそんなのやら……」

千「自薦他薦は問わない。」

—「い、いやでも。」

あきらめろ、決定事項だ

セ「待ってください！納得がいきませんわ！」

きたよ、うざいのが

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

マジでうざっ！

セ「実力でいけばわたくしが代表になるのは必然。それを、物珍しからという理由で

極東の猿にされてはこまります！」

俺が猿ならあんたは何だよ？

あんまり調子に乗るなよカス

セ「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、

わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

ブチッ

「いい加減にしろよ、カスが！黙って聞いてりゃいい気になりやがって！」

大体その後進的な国で開発されたISの代表候補生になったからって、

威張ってたのはどこのカスだ！」

ー「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

セ「なっ！？貴方たち、わたくしと祖国を侮辱しますの！？」

「あんたの態度を見てると格下には侮辱してもいいって言ってるよ
うなもんだぜ？」

セ「わたくしがあなたより劣っていると申しますの！？」

「ああ、そうだね。俺より優れていると言いたいならISの「コアぐらい作れるようになれよ。」

『無理だよ、神杉君、ISのコアは篠ノ之博士意外に作れないんだから。』

「俺は作れるぜ、しかも篠ノ之束のお墨付きだ。」

セ「っ！決闘ですわ！」

「別にいいぜハンデはどのくらいつける？」

セ「あら、早速お願いかしら。」

「いや、俺がハンデをつけるんだよ。」

そついうと、クラスで爆笑が巻き起こった

『本気で言ってるの？神杉君？』

『男が女より強かったのって大昔の話だよ？』

「でもそれはISが使えたからだろ。俺らはISを使えるからここに
いるんだぜ？」

『でも相手は代表候補生だよ？』

「代表候補生は一部を除き、その国の人しかねないから、国のレベルが低ければ代表候補生だって弱い。」

「大体俺は篠ノ之束に並ぶ天才だぜ？そんなカスに負ける訳が無い。」

千「さて、話はまとまったな。それでは一週間後の月曜に勝負を行う。」

織斑と神杉とオルコットは用意をしておけ。」

さあて、どうあそんでやるか

その後、とある教室

？「過去の経歴が不明、ノーナンバーのコアの機体を使う男ねえ。さらにコアを作れるとは。」

しかもいきなり代表候補生に勝負を挑むなんて。

ふふ、面白い人ね。」

IS学園（後書き）

とりあえずセシリア戦の機体は決まりました。
何なのかは次回あたりに。

同居人？（前書き）

すみません、結構読みづらいかもしれません

同居人？

放課後、俺は一夏とともに机にうな垂れていた

「痛い、胃が痛い。」

一夏は違うことでうな垂れているようだが、俺はあの金髪ドリルの
ストレスで

胃がとても痛くなっていた

しかも、今は他のクラスからも女子が来て（俺達意外女子だが）
小声でこそこそ話している

俺はこういうのが嫌いだ、聞いているとイライラするのだ、
それによりさらに胃が痛くなりかなりやばい。

山「ああ、二人ともまだ教室にいたんですね、良かった。」

「なんすか？」

俺が顔を上げると同時に一夏も顔を上げた

山「えっと、お二人の部屋が決まりました。」

一「あれ、俺らの部屋って決まっていなかったんですか？
聞いた話だと一週間は自宅から通学だった。」

俺はホテルだが。

山「そうなんです、事情が事情なので無理やり部屋割りを変えた
そうです。」

一「まあ、分かりましたけど荷物はどうするんですか？」

あれ？ダースベイダーの曲が聞こえる

千「私が用意しておいた。」

「あれ？俺のプラモは？」

千「無理やりバッグに詰め込んだ、変な音がしたが大丈夫だろう。」

「ううー」。

くそ、この人相手じゃ文句が言えない、
俺のガンプラが、

山「じゃあ、時間を見て部屋に行ってください。」

その後夕飯の時間や大浴場についてなどを聞き、今は部屋に向かっ
ている

そして

「・・・いつまで着いてくるんですか？」

部屋の前でストーカーさんに話しかける

？「あら、気付かれちゃった。」

「何の用ですか？生徒会長さん。」

？「・・・なんで知ってるのかしら。」

「まあ、いろいろあって貴女の情報を見たんですよ、更織楯無さん。まあ、詳しくは分かりませんでしたけど。」

半分嘘だ、この人の事は前から知っていた、原作でも出てたしね、でも本当に詳しいことが分からなくなっている

楯「そう、よく考えるとあなたならできそうね。」

「まあ、別に誰かに言うわけじゃありませんから安心してください」

楯「そう、分かったわ。」

「所でなんでストーキングなんてしたんですか。」

楯「少し興味があつたからね、男のIS操縦者で篠ノ之束と同じくらしい天才

普通は気になるでしょう。」

「そうですか、じゃあ、部屋に入るんで。」

楯「ええ、それじゃ、またあとで。」

そして俺は部屋に入り、数分すると、誰かが入ってきた

きつと同室の人だろう

楯「ハロー」

「何でいるんですか？更織さん。」

楯「だってここ私の部屋だもの。」

「really?（本当ですか？）」「」

楯「何で英語？ええ、まあ本当よ、面白そうだから一緒の部屋にしちゃった。」

「そんな、てへ、みたいな感じで言われても」

楯「まあ、いいじゃない、それをお願いもあるし。」

「却下です」

楯「何にも言っていないじゃない。」

「絶対面倒なことですから。」

楯「残念ながら拒否権はないわ、内容だけどあなたには生徒会副会長になってもらうわ。」

「はあ、仕方が無いですね、まあ、いいですけど。」

楯「ありがとー」

突然楯無さんが抱きついてきた

「ちょっと、あんまり抱きつかないでください」

楯「別にいいじゃない、減るものじゃないし。」

「俺じゃなかったら、襲ってるかも知れせんよ。」

楯「あら、別にいいのよ襲っても。」

「やめてください、本気にしたらどうするんですか。」

楯「うーん、責任を取ってもらおうかな」

「はあ、ほんとに疲れる。」

ため息をつきながら様子を見る。

楯「にこ」

うん、すごいかわいい、じゃなくてなんて人たらしなんだろう

「もう疲れたんで寝ます。」

楯「じゃあ、そっちのベッドを使ってね」

「はい」

そして俺は眠りについた

同居人？（後書き）

この続きどうしよう

クラス代表決定戦 その1（前書き）

今回はセシリア戦のパート1です。

クラス代表決定戦 その1

朝、俺はいつもと同じくらいの時間に起きた
しかし、違和感がある、何故か動けないのだ、
何事かと布団を捲ると、静かに寝息を立てている楯無さんが抱きつ
いていた

「あれ、なんで居るんだ？」

楯「うーん、おはよう。」

楯無さんも起きたようだ

「ちょっと楯無さん、なんで居るんですか。」

楯「だって、ここ私のベッドだもの。」

「俺言われた場所に寝ましたよね？」

楯「ええ、でもあなたのベッドとは言ってないわ。」

「じゃあ、あつちに寝ます、ってあれ!？」

そこには昨日はあったはずのベッドが無くなっていた

楯「会長権限で撤去しちゃった。」

「マジですか？」

楯「ええ、本気と書いてマジと読むわ。」

「はぁー」

昨日一日過ごしただけで分かった事がある、
この人に逆らうだけ無駄だと言う事だ

楯「そんな事より朝食を食べに行きましょう？」

「別に良いですけど、早く着替えてくださいよ。」

今の楯無の服装はYシャツに下着、
はつきり言って目のやり場に困る

楯「気になるの？」

そついつて、俺の腕にしがみ付いて来る、
腕に柔らかな感触が、

「ちょ、くつついてますって。」

楯「ふふふ、えっちなぁ。」

「楯無さんがやったんでしょうが」

楯「まあまあ、時間なくなるわよ？」

「はいはい、じゃあ入って来ないで下さいよ。」

そついつて洗面所に入り着替え始める

そして着替え終えるて洗面所から出ると既に着替えた楯無さんが居た

楯「じゃあ、いきましようか、おねーさんお腹すいちゃったわ。」

「はいはい」

食堂

いま俺は朝食を食べている、普段なら簡単なことなのに俺は多分今までで一番手間取っている。

その理由がやはり

楯「はい、あーん」

楯無さんだ

なぜかさつきからずっと食べさせようとしてくる昨日この人に逆らったら一時間以上くすぐられた、本当にあれはやばかった、腹筋が破壊される所だった

そうなると

「あ、あーん」

食べないと駄目なんだよね

そしてこれが毎日になり

あつという間にクラス代表決定戦当日となった
しかしまだ一夏の機体が届かない

一夏対ドリルの勝者と戦うから、俺もひまなんだよね。

それになんか一夏と箒の間で妙な空気が流れている

一「なあ、箒」

箒「何だ、一夏」

・・・空気が重い

一「気のせいかもしれないが」

箒「そうか。気のせいだろう」

一「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ？」

ああ、そういうことか。

箒「・・・・・・・・・・」

もしかして

一「目をそらすなっ」

そういえば一夏の奴毎日剣道場に行ってたな

—「・・・・・・・・・・」

第「・・・・・・・・・・」

うっ、耐え切れない

山「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

ナイス、山田先生

—「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

山「は、はい。すゝはゝ、すゝはゝ」

—「はい、そこで止めて」

山「うっ」

おいおい、本気で止めてるぞ、冗談通じないよな、この人

—「・・・・・・・・・・」

山「・・・・・・・・ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

たぶんやめさせるタイミングを見失っただけだと思います

千「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

パアンッ！

相変わらずすごい音だ

ー「千冬姉」

ああ、バカだな、そんな事言ったら

パンツ！

もう一発来るに決まってるだろ

千「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなければ死ね。」

そりゃあ教師の台詞じゃないですよ

山「そ、そ、それですなっ！きました！織斑くんのIS」

やっときたか、待ちくたびれたぜ

それなのに

あれだけ待たせたのに

- - - - - 勝者、セシリア・オルコット

何で負けてんだよ、このバカ野郎！

まあいい、次は俺の番だ！

クラス代表決定戦 その1（後書き）

ぜひ感想お願いします

クラス代表決定戦 その2（前書き）

今回でクラス代表決定戦は終了です。

クラス代表決定戦 その2

「ヴァリアス、タイプセレクト デスサイズヘルカスタム」

そう言うと体にデスサイズヘルカスタムの装甲が展開される

「さあ、わがままお姫様にお仕置きをしようか」

そしてピットからアリーナに降りる

「さあ、はじめようぜ」

セ「・・・・・・・・」

あれ？返事が無い

「おい、ドリル頭」

セ「はっ！？すいません、少し考え事をしてました」

ああ、そういえば一夏にフラグが立つんだっけ

別にドリルは好きじゃないから別にいいけど

「さっさと始めようぜ」

セ「わかりました、始めましょう」

そしてブザーが鳴った

「いくぜ！」

まず俺は鎌を振り、斬撃を飛ばす

セ「その程度の攻撃！」

セシリアはその攻撃をかわす、しかしその先にはすでに俺がいた

「はあっ！」

そして斬撃を当てる

セ「くっ！まだですわ！」

セシリアは距離をとり、ビットを飛ばしてくる

「そんな攻撃に当たるわけ無いだろ」

俺はビットをかわしながら壊していく、

「さっさと終わらせようぜ」

全てのビットを壊すと俺はハイパージャマーを使う

確かあれにはミサイルが隠されていたはず
姿が見えなければ当てられないからな

セ「どこに行きましたの！？」

やべ、見てておもしろい

「こっちだよ」

俺はセシリアがこっちを向くと同時に鎌を振り下ろした
どうやらその一撃でシールドエネルギーが尽きたようだ

『試合終了、勝者、神杉来斗』

パンッ！

試合を終えてピットに戻ると織斑先生の出席簿が待っていた

「いったあー！」

千「遊びすぎだばか者、束からの情報だと開始数秒で終わるはずだ」

確かにストライクフリーダムとかクアンタ使えばいけるかも知れない

「でもそれならそれで怒るでしょ？」

千「まあ、そうだな。ほどほどにしろと言っ事だ」

「了解です」

千「では、今日はゆっくり休め」

クラス代表決定戦 その2（後書き）

戦闘描写がすごく難しいです

ちなみにヒロインは楯無とシャルの予定です

セシリア戦後 部屋にて（前書き）

すいません、FF零式ばっかやってました
テストも近いのに・・・

セシリア戦後 部屋にて

セシリアと戦った後、俺は部屋に戻っていた

「はあ、今日はなんか疲れたな」

ISってまだ慣れてないからな、しょうがないのかもしれない

そう考えているうちに部屋に着いた

「早く寝よ。」

ガチャ

楯「お帰りなさい、ご飯にする？お風呂にする？それとも、わ・た・し？」

バンツ！

幻覚だな、うん、きっとそうだ

いくら同じ部屋だからって、楯無さんが裸エプロンで居るわけがない

でもなんでよりにもよって裸エプロン

そんな特殊な性癖があったのか、俺は

いや、そんな訳がない、たまたまだ、たまたま

では気を取り直して

ガチャ

楯「お帰りなさい、私にする？私にする？それともわ・た・し？」

もう現実逃避はやめよう、これは正真正銘本物の楯無さんだ

楯無さん、止めさせないと毎日この格好で待ってそうだからな、でも言葉で言っても聞きそうにないしな、

だったら、

「それじゃあ、楯無さんを貰いましょう」

そう言つて俺は楯無さんをベッドに押し倒す

「楯無さんが誘つてきたんですからね」

耳に息を吹きかける

楯「ふああ、あ、あれは冗談で」

ふふ、かわいいな

「楯無さんは俺じゃ嫌？」

楯「そ、それは、その・・・」

楯無さんみたいな人ってからかわれるのに大抵慣れてないんだよね
でもかわいそうになつてきたな

「ははは、楯無さんってからかわれるのに慣れてないんですね」

楯「え？どういうこと？」

「ふふ、さっきまでは冗談ですよ」

楯「も、もう！おねえさんをからかっちゃだめよ」

「でも、次あんな格好したら本当に食べちゃいますよ」

これできっと、もうやらないはず

楯「そのときは、責任を取ってもらうわ。」

あれ？

「えっと、どういうことですか？」

楯「一生を共にしてもらうわ」

酷くなってるよね！？

「それって要するにけ、」

楯「はいはい、夕飯たべにいきましょうー」

むう、遮られてしまった

でも顔が赤かったし、まんざらでもないのかな？

でも、楯無さんも一夏ラバーズに入ってたわけ、

まあ、もともと俺が居る時点で原作ブレイクしちゃってますけど

この日から何故か夜に楯無さんと寝るとときどきして寝れなくなった

セシリア戦後 部屋にて（後書き）

シャルロットまで遠いなあー

楯無さんもキャラあってるかわからんし
書いてみるとかなり難しいですね

それと、ぜひ感想お願いします

代表決定！（前書き）

すいません、テストが近く、勉強の合間に書く感じなので
11月24位までの間、投稿が遅くなります

代表決定！

翌日、朝のHR

山「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。
あ、一繋がりでいい感じですね！」

はは、一夏の奴めっちゃ暗い顔してやがる

一「先生、質問です」

山「はい、織斑くん」

一「俺は昨日の試合に負けたのに、なんでクラス代表になってるんですか？」

山「それは……」

セ「それはわたくしが辞退したからですわ」

一夏に惚れてから態度は変わったけど

いちいち腰に手を当てるポーズやら上から目線な言葉、変わらないな

？「君はなぜ辞退したんだ？」

耳ではなく、頭から聞こえる声

「まあ、一夏には強くなってもらわないと駄目だからな」

？「そういう事にしておこう」

ちっ、コイツには面倒だからやめたって事が気付かれてやがる

あ、ちなみにコイツのことを説明するには数時間前にさかのぼらなくちゃいけない

数時間前

「ふああ、ふう」

いつもの時間に起きると楯無さんが隣に居た、ただひとつ違うのは前まであったYシャツが無くなり、下着だけで寝ている

まあ、こういうのにはもう慣れたけどね

しかし、それ以外にも違うところがあった、腕時計が腕に付いていた

（あれ？おれ時計なんて持ってなかったよな？）

すると、頭の中に声が響いてきた

神『おひさしぶりです、来斗さん』

『あんだあの時の神か？』

神『ええ、そうです、今回は用件があつてきました』

『なんだ？用件って？』

神『実は以前に渡し忘れたものがあつたので』

『あの腕時計のことか？』

神『はい、あれにはAIが入ってます、ちなみに投影も出来ますよ』

『なんだよその近未来的な腕時計！？』

神『ちなみにAIは自分で選べますよ』

『種類は？』

神『えっと、ティエリアとかフェルトとかキラとかアスランとかです
すね』

『声って外の聞こえるのか？』

神『それは大丈夫です、声は今みたいに頭に響く感じなんで、
まあ、外部音声も使えますけど』

『じゃあ、用件は終わりか？』

神『後ひとつだけ、あなたがこの世界に来たことでイレギュラーな存在が出現したようでそれを壊して欲しいんです』

『目印とかは？』

神『あなたと同じMSです』

『MSだな、分かった』

神『くれぐれも気をつけてください』

『ああ、分かってるよ』

神『それでは』

つて事があつたのだ

前まであった八口は楯無さんにあげた、水色の小型のボディーにして何でも仕事の手伝いに使うそうだ
まあ、情報処理能力が高いからね

それじゃあ、戻って

ー「じゃあ、来斗でいいじゃないですか」

見苦しいな、一夏

「俺も辞退した」

—「何でだよ!？」

「お前なあ、よく考えろ、お前は狙われてるのに今の弱いままだったら何があるかわかんないだろ？」

—「まあ、それはそうだな。そこまで考えてるとは、見直したぞ」

「まあ、実際は面倒だったからだけど」

—「ちよつと見直した俺が馬鹿だったよ」

ふつ、やっぱりこういうのは楽しい、悪趣味?そんなことはありません

もう少し遊ぼうか

「そうだよ!お前は馬鹿だ!」

—「ひどっ!そこまで言うこと無いだろ」

「否定できるのか?」

—「うつ、それは」

千「おい、いい加減に話を進めろ、そして織斑が馬鹿なのは昔からだ」

ダースベーター登場

ー「千冬姉まで!？」

やっぱ馬鹿だ、禁句言いやがった

バシンッ!

千「織斑先生だ」

ー「すいませんでした」

ものすごい勢いで椅子の上で土下座をする一夏

千「クラス代表は織斑一夏、異存は無いな？」

はーいと全員（一夏除く）が返事、

俺は返事をしながら、せめてかまってあげようよと、
一夏を見ると、まだ土下座をしている

ティ『君のせいな気がするんだが』

聞こえない、聞こえないよ、ティエリアの声なんて

そんな感じで朝のHRは終わった

代表決定！（後書き）

友達にこの小説について聞いたら、なんか足りないって言われたのですが、自分ではよく分からないので、アドバイスお願いします

お祝いパーティー（前書き）

遅くなつてすいません
もうすぐテストが終わるので

お祝いパーティー

千「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。
織斑、神杉、オルコット。試しに飛んで見せる」

この人はほんと強引だな、と思いながらもやらないと怒られるので
展開をすることにした

「ヴァリアス タイプセレクト ウイングゼロカスタム」

そついうと一秒もしないうちに装甲が展開される
周囲からは『きれい』や『かつこいい』という声が聞こえる

まあ、ウイングゼロカスタムだからな、翼がすごい綺麗なんだよね

千「おい織斑、早く展開しろ。神杉を見習え、

熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

一夏のやつ、まだ展開してないのか。

まったく、遅いな

その後、一夏は無事に展開、しかし、上昇スピードが遅く、また怒
られていた

しかも下降の時、すごいスピードで俺に落下してきた
まったく、ティエリアが教えてくれなかったらどうなってたか

まあ、後は武装展開の時も遅いつて言われてたなー、
俺？もちろん大丈夫だったよ？

一夏は授業終了後もグラウンドの穴埋めに時間を使っていた

・・・・・・・・・・・・・・・・

『というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！』

はい、なぜこんな状況なのか、情報を整理しよう

部屋に戻る↓時間を潰す↓クラスの女子が来る↓食堂につれてこられる（今ここ！！）

情報整理完了っ

まあ、面白そうだからいいかな？

『いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がねえ』

『ほんとほんと』

『ラッキーだったよねー。同じクラスになれて』

『ほんとほんと』

おい！そのやつ！お前は二組だろっ！

ていうか、明らかに一クラス以上の人数居るだろ！

まあ、こんな状況の女子に何を言っても無駄だろう

俺もせいぜい楽しもう

そしてひとまず腹の減った俺は飯を食おうと思ったのだが

？「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏さんと神杉来斗さんに特別インタビューをしましたー！」

オー、と皆が言う、なんでオー？

薫「あ、私は二年の薫薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってます。

ハイこれ名刺」

何で名刺持つてんだよ

ていつか滅茶苦茶画数多いな、めんどくさそうだ

薫「ではまず織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

ああ、俺もあとから言わなきゃいけないのか、めんどい

ー「えーと……

まあ、なんというか、がんばります」

薫「えー。もっといいコメントちょうだいよー。

俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

うわッ！ふるッ！

ー「自分、不器用ですから」

こっちもふるッ！

薫「うわ、前時代的！」

貴女もです

薫「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

いやッ！駄目でしょ！

薫「じゃあ、来斗くんコメントお願い」

「ああはい、俺に近づいたら・・・たべちゃうよ」

ばたっ！

あれ？何人が倒れちゃった、どうしたんだろう

薫「い、いいコメントをありがとう」

それじゃあ、専用機持ちの集合写真を撮らせてね」

先輩はさっさと俺達を引っ張って行って、並ばせた

薫「それじゃあ取るよー。35×51÷24は？」

「74、375です」

薫「ご名答！」

パシヤ

あ、あれ？何故か全員はいつてる、なぜ？

あの一瞬に移動したのか！？

その後の部屋で

楯「いやー、来斗君凄いこと言っただねえー」

「何のことですか？」

楯「さっきのパーティーの取材の時よ

俺に近づいたら食べちゃうよだっけ、じゃあ私も食べられちゃうのね」

おおよ、て感じで崩れ落ちるふりをする楯無さん

「安心してください、嘘ですから」

楯「あら、それは残念。それじゃあ早く寝ましょう」

「はいはい、わかりましたよ」

ベッドに入ると当たり前の様に楯無さんが抱きついてくる

楯「それじゃあ、お休み」

「おやすみ」

そして俺は眠りに付いた

お祝いパーティー（後書き）

つぎも宜しくお願いします

転校生はセカンド幼なじみ（前書き）

懲りずにテスト週間中に投稿です

まあ、一様やるにはやりましたが・・・

あ、あと、今書いてる『インフィニットストラトス零式』でアンケートを取ってるのでこっちもお願いします

転校生はセカンド幼なじみ

翌朝

『織斑くんと神杉くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?』

「「転校生?」」

朝、教室に入るなりクラスメイトに話しかけられた

まだ四月なのに転校か、

確かIS学園は転入には厳しい条件があつたはずだよな

『そう、なんでも中国の代表候補生なんだつてさ』

「「ふーん」」

セ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

イギリスの代表候補生登場

まったく腰に手を当てるのいい加減に止めて欲しいんだけどな

第「このクラスに転校してくるわけではないのだろう?

騒ぐほどのこともあるまい」

あれ?第?さっきまで窓際に居なかったか?

—「「どんなやつなんだろうな」」

アンタの幼なじみです

第「気になるのか？」

—「ん？ああ、少しは」

第「ふん・・・」

一夏の奴多分違うこと考えてるな
まったく鈍感な奴だ

第「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？
来月にはクラス対抗戦があるというのに」

セ「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実
戦的な訓練をしましょう。

ああ、相手ならこのセシリア・オルコットが務めさせていただきま
すわ。

なにせ、専用機を持っているのはこのクラスでは、
わたくしと来斗さんと一夏さんだけなのですから」

—「まあ、やれるだけやってみるか」

セ「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませ
んと！」

第「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

『織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー』

まあ、無理だろうな、上手く飛翔する事も出来ないんだからな
セシリアの時はちゃんと使えてやがったくせに

って気付いたら周囲が女子だらけだ

『織斑くんがんばってねー』

『フリーパスのためにもね!』

『今の所専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、
余裕だよ』

一夏も気の毒に、と考えていると不意に別の声が聞こえた

?「……その情報、古いよ」

見てみると、腕を組み、片膝を立ててドアにもたれている……え
ーと

一「鈴……?お前、鈴か?」

そうそう、鈴だ。

りと聞いてコイツじゃなくて鏡音リンを想像した俺は悪くないはず

鈴「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。

今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑う

一「何格好付けてるんだ?」

鈴「んなっ……!?なんてこと言うのよアンタは!」

なんだ、演技だったのか。

ちよつとコイツのこと忘れかけてたから分からなかった

ティ「そついえば、原作の知識を幾らか消してるらしいぞ」

久しぶりに登場、ティエリア！

『そついうのは先に言おうぜ』

ティ「すまない、忘れていた」

『おいおい、頼むぜ』

ティ「次からは気をつける」

はい！今回の出番終了ー！

千「お前も早く席に戻れ」

あれ、why!?(なぜ!?)何であいつら居ないの？
話してる間に戻ったのかよ!?

そして今日もISの訓練と授業が始まる

転校生はセカンド幼なじみ（後書き）

実は私、学校でお前オタクじゃない？とか言われています
まあ、あんまり気にしてないですが
そんなにボカ口って悪いですかね？

自分の気持ち（前書き）

はい、テスト勉強で徹夜してる合間に投稿です

自分の気持ち

その日の放課後、一夏の特訓を手伝ったあと、シャワーを浴びたり、夕食を食べたり

して、現在時刻八時過ぎ

くつろぐムードの俺はお茶を飲みながら本を読んでいた、すると楯無さんが話しかけてきた

「ねえ、最近冷たくない？」

「そうですね？」

毎日一緒に寝てるけど

「最近あんまりヤらないじゃない？」

はっ？

「なにをですか？」

なにかしてたかな？

「ん〜と、こういうことかな」

そついうと楯無さんは俺を床に押し倒す

「ちよっ！そんなこと一回もしてないですよ！」

「あら、この間してくれたじゃない」

まさかあれか

「あれはからかってやったんですよ!？」

「そんな、あそこまでやったのに、やっぱり私との関係は遊びだったのね？」

「いやいや、そんな関係じゃないですし」

「じゃあ、即成事実を作りましょうか」

え？冗談だろ？冗談ですよ？

「やめ！止めてください!!」

この人じゃ本当にやりかねない

「ふふ、それじゃあ」

顔を近づけてくる楯無さん

え？近い近い、俺の顔との間残り十センチ！

「止めてください！マジで!」

「ふふ、じゃあ」

どかぁん!!

突如隣の一夏の部屋から爆音が

そしてその振動で机の上の本が何か言いかけた楯無のヘッドに落下

「痛っ！んむ！？」

「んむ！？んん！？」

目の前には楯無さんのドアップの顔そして

・・・唇に柔らかい感触

え？ええ！？

「ぷは！な、なにするんですか！楯無さん！？」

「え？ああ、ええ」

やばい、フリーズしてる

「楯無さんおきて！起きないとまたキスしますよ？」

「ええ、喜んで！」

あ、目覚めた

「じゃあもう一回しましょう」

「今の冗談です」

「ええ、そんな」

てか軽いな！

「きにしないんですか？キスしたの」

「ええ、初めてが貴方なら」

はい？

「冗談ですよね？」

「さあ、どうかしら？」

やばい、はめられた！

「ちょっと一夏殺ってきます」

「やりすぎないようにね」

「さあ？わからんな？」

.....

楯無視点

うう、キスしちゃった

事故とはいえファーストキスだったのに・・・

でも初めてが彼で良かった、

ふふ、もうこれは惚れちゃったかな？

でも次はもっといいムードでやりたいかな

.....

もどつて来斗視点

俺はいま一夏の部屋の前に居る、音が聞こえないし寝てるのかな、かな？

やばい、なんか変なスイッチはいった

まあ、いいや

とりあえず・・・

「死にさらせ！織斑一夏あゝ！！！」

案の定部屋には一夏だけ、かと思いきや箒が居たでもそんなのかんけいねえ！

「ファーストキスの責任を取りやがれ！」

あれ？なんか言い方間違った？

「は？なんの事だ？俺にそっちの趣味は無いぞ！」

「お前のせいで俺は初めてのキスをうばわれたんだ！」

「な！？まさか！一夏あ！」

箒、参戦

「ちが、箒、ごか」

メキっ！ゴキっ！

「頼む、やめ」

「聞く耳もたん！」

バキっ！ゴシヤ！

「ああ！駄目！その間接はそっちには・・」

メキヤっ！ゴキユっ！

「まあ、こんなものだろう」

「・・・・・・・・・・」

後に残ったのは動かなくなった一夏の屍のみ、一件落着！

さあ、部屋に戻ろう

・・・・・・・・・・

場所は戻って自室

「ねえ、来斗くん」

「なんですか？」

「その敬語止めてくれない？」

「なぜですか？」

「なんでも！」

そういつて覆いかぶさってくる楯無さん

「言わないとまたキスするわよ」

「わかった！楯無！」

キスに比べたらお安い御用だ

「ぶう、そんなに私とのキスは嫌？」

やばいです。

涙目上目づかいの楯無

「いや、嫌じゃないけど」

「じゃあ、良いじゃない」

ええ？だめでしょ

「駄目だろ、付き合っても無いんだから」

「私の事嫌い？」

「さあ？どうだろう？」

「ぶっ、いじわるっ」

頬を膨らませた楯無もかわ、ゲフンゲフン

「早く寝ないと一緒に寝ないよ？」

「わかった！」

そういつて布団に入って抱きついてくる

「・・・私はこんなに好きなのに」

「・・・俺は・・・好きなのか？」

・・・二人のつぶやきは相手には聞こえなかった

自分の気持ち（後書き）

はあ、テスト勉強めんどいなあ。

あ、「IS 零式」のアンケートも宜しく願いします

クラス対抗戦（前書き）

またまた懲りずに投稿

あはは、終わったね、いろんな意味で

零式はアンケート結果が出ないと書けないので
ベースは作っておきましたけど

クラス対抗戦

後日話を聞いた所、あの謎の振動は一夏が鈴を怒らせた際にISの部分展開で壁を殴ったせいらしい

・・・後日再び一夏をボコった

あの後、楯無さんが妙に積極的になったんだよね
まあ、前から積極的だったけどさ

・・・・・・・・・・・・・・・・

んでもって試合当日

第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴
もうすでに鈴と一夏はアリーナにスタンバイ中
でもさ、何で甲龍って書いてシエンロンって読むんだろ
シエンロンってあれだよな、星入りの玉七つ集めると出てくる龍
おっと、試合が始まる

開始早々一夏は押されていた、あの馬鹿でかい青竜刀を避けるのに
苦労してやがる

そして俺は内心

（やれ！もっとやれ！殺してしまえええ！！）

と、そんな時、一夏が吹っ飛ばされた

（うっしやあ！ナイスだ鈴！）

うん、皆の敵だね、おれ

ドガァァン！！

そんな思考のなか、アリーナに異物が落ちてきたのだが
『おい、来斗。二十キロ先の海上にイレギュラー反応だ』

『あの神が言ってた奴か、タイプは？』

『タイプは・・・な！？サイコガンダムにデストロイガンダムだと
！？』

『は！？相当やばいだろ！さっさと行くぞ！』

俺はアリーナの方を一夏達に任せ、気付かれないようにアリーナの
外に出ようとするが
ハッキングでシエルターが降りていて出られない

「ちっ！めんどいがやるしかない」

俺はISを呼びだす

「ヴァリアス、タイプセレクト、ストライクフリーダム！」

俺はISを展開すると、シエルターをビームサーベルで切り裂く

『時間が無い、急ごう！』

「ああ！」

俺は最高スピードでターゲットに向かった

・・・・・・・・・・

千冬サイド

「織斑先生！二十キロ先の海上にアンノウン反応です！」

試合中に謎の機体が現れたと思ったら、山田先生が言う

「それは本当か？」

「はい、なっ！？アンノウンに向かう反応これは

・・・神杉君です、神杉君がアンノウンと接触しました！」

「通信は取れるか？」

「やってみます！」

・・・・・・・・・・

来斗サイド

『来斗、通信だ！』

「んだよこのくそ忙しい時に！つなげる！」

たった今、目標に接触した時にティエリアに言われた

『分かった』

『おい！神杉！何をしている！』

千冬さんの怒鳴り声

「何って、こいつらと遊んでるんですよ」

『お前、そいつらが来るのを知っていたのか！？』

「いえ、ついさっき来たばかりです」

『まっている今教師を援軍に送る！』

「いえ、止めてください。はっきり言って邪魔です！」

こんな歩く要塞と教師じゃ二分と持たない

『何を言って』

「すみません、切ります！」

まだ相手には気付かれてないな

「おい！ティエリア、ドラグーンの操作は任せる！」

『了解』

「さあ、行くぜ。こっから先は瞬き禁止だ！」

まず、陽電子リフレクターがあり、時間のかかる

デストロイは後回しでサイコから倒すことにする

「行け！ドラグーン！」

まずドラグーンをデストロイに飛ばし、デストロイの注意を引いて
おいて貰う

そしてヴォワチュール・リュミエールシステムを発動、光の翼が放
出される

そして超高速で接近し、ビームサーベルで右の指のビーム砲を切り
落とす

その勢いのまま、左側に回り、同様に指を切り落とす

全身がGによって軋むが無視し、ハイマツトフルバーストをうち、
沈める

「ティエリア、そっちはどうだ？」

『まだ一機も落されてはいないが、エネルギーがもう切れる』

「じゃあ、こっち終わったから一回戻れ」

『了解』

そついうと、翼にドラグーンが戻っていく

「コイツにはビームサーベルしか効かないからな。

ヴァリアス、タイプセレクト、ガンダムエピオン！」

ビームサーベルだったらコイツだよな

「さっさと元の居場所に引き返しやがれ！」

俺はビームサーベルを空に掲げ、巨大になったそれを持ったまま一回転する

そしてその後には、真つ二つになったデストロイが海に沈んでいった

「・・・切捨て御免」

『なに格好つけてるんだ』

「まあ、いいじゃん。こんな時くらい」

『ふ、それもそうだな』

「さて、戻りますか」

『帰ったら先生の説教だな』

は！忘れてた

「そういえば、無断で出てきたんだっけ。そういえば一夏達は？」

あいつらに任せてきたからな

『原作と違って再起動もなく、けが人も出なかったそうだ』

「そうか、そりゃあ良かった」

原作だと一夏が怪我するからな

・・・俺が帰ったらボコれなくなる

.....

千冬サイド

「海上のアンノウン反応消失、神杉くんが帰還します」

「やれやれ、あいつにも困ったものだ、しかしいったい誰が？」

「織斑先生？」

「いや、なんでもない。神杉の方のアンノウンの回収を。
あと、神杉をレベル4エリアに呼んでください」

レベル4エリアとはその言葉どおり、
レベル4以上の権限を持った人物しかは入れないエリアだ

「了解しました」

.....

来斗サイド

「で、なんの用ですか？」

おれは今、織斑先生に呼ばれて、地下の良く分からない空間に居る
そこにはアリーナに落ちてきた、無人機と、サイコ、デストロイが
あった

「・・・この二機どうやって運んだんですか？」

いくらスケールダウンしてても、十数メートルはあるんだけど

「教師五人で運んだんだ。ここには隠し通路があるからそこから運んだ」

そんなものであるのか

「所でそっちの無人機ですけど」

俺はアリーナに落ちたほうの無人機を見る

「ああ、お前もそう思うか？」

「はい、多分あのウサギがやったんでしょう」

「それよりもこっちだ」

織斑先生はサイコ、デストロイを見る

「未開発のビーム兵器に陽電子リフレクター、オーバーテクノロジーの塊だぞ」

「ええ、まあそりゃそうでしょうね」

「お前が知っていることを洗いざらい吐け！」

「ええ、だったら俺の昔話から話さないといけないんですけど。」

「聞こう」

「その前に確認しますが、絶対に言わないでくださいよ。話してもいい人は俺が信用した人だけですから」

「分かった、約束しよう」

「まず、俺はこの世界の人間じゃない」

「なっ！？どういうことだ！？」

「もともと俺は、違う世界で普通に生きていた。

そこに車に轢かれそうな猫が、俺はそれをかばい、死亡って感じですよ。そして目が覚めたらあら不思議、不思議な空間に居ました

そしてそこには神様が居て、俺の助けた猫が神様の親友のペットだったわけです

それでそのお礼って事で俺の世界で見てたアニメのガンダムをISにして

この世界に転生させてもらいました。

しかしその時に不具合があって、そいつらみたいなのが出てきた訳です」

「ふむ、確かに信じろと言うほうが無理だが、目の前に居るのだから信じるしかないな」

「ちなみに俺はそいつらをイレギュラーって呼んでますが、そいつらは装甲が特殊なんで基本的に俺にしか倒せません」

PS装甲とか、ほとんどのISの武器が効かないからな

「わかった、イレギュラーが現れたときは知らせよう」

「と言うか、そろそろ寝ても良いですか？」

「本当なら懲罰物だが、まあこの件は許しておこう。」ご苦労だった」

「はい、それでは」

・・・・・・・・・・・・・・・・

場所は変わって自室

「来斗、今日はずいぶん活躍したわね」

部屋でシャワーを浴びて寝る準備をしていると
楯無に言われた

「まあ、な」

「あれは何だったの？」

「まあ、お前なら話してもいいか」

そして俺は織斑先生に話したのと同じ事を楯無に教えた

「そうだったの」

「ん、まあ、こっちの方が楽しいから良いんだけどな、てかむしろ
感謝してる」

「ふふ、あなたらしいわね」

「まあ、俺は俺だからな」

「それじゃあ、今日はご苦労様」

チュッ

「お、おい！？何を！？」

「今日がんばったご褒美よ」

「だからってそんな」

「良いから良いから、早く寝ましょう」

うつ、いったいなんだ？ 楯無は俺の事が好きなのか？
そんな考えを遮るように睡魔が襲ってきた

・・・・・・・・・・・・・・・・

楯無サイド

来斗に聞いた彼の秘密、やっぱり驚くけど
嬉しいとも思った、私に秘密を教えてくれたから
それでも、秘密を知っても、もっと、もっと彼の事が知りたい
こんなに人を好きになるなんて初めてだ
凄いときどきして、凄い胸が苦しい

でも凄くしあわせ
すごく彼が愛おしい

・・・ずっと私と一緒に居てほしい

クラス対抗戦（後書き）

今日も徹夜ですよ。

ほんとテストなんて消えればいいんだ

ちなみにこの小説のヒロインは楯無だけじゃなくシャルもです
まだ楯無しか出てないですが

緊急アンケート（前書き）

今回はアンケートです

緊急アンケート

緊急アンケートです

ええと非常に申し上げづらいのですが、この小説のヒロインを楯無一人に

絞ろうかなと思っています

読者の方々も楯無だけの方が良いって人や、ここから入れるのは無理がある

などの意見をいただきました

楯無一人がいいか

シャルも入れるかを聞きたいと思います

もしシャルを入れない場合

IS零式の方が大体ストーリーが出来てるので、

それが完結した後にまったく違う物としてシャルがヒロインのを作ろうと思います

それについても意見をお願いします

緊急アンケート（後書き）

締め切りは早く続きを書きたいので十一月二十六日にしたいと思います

休日と告白（前書き）

すいません昨日のうちに投稿すると言ったのに出来ませんでした

ヒロインはアンケートの結果、楯無に決定です

そして今回読むとき注意してください

・・・何かは聞かないでください

休日と告白

六月頭の日曜日。

俺は楯無との待ち合わせ場所に向かっている
その理由は昨日・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ、来斗」

いつも通り部屋でくつろいでいると、不意に楯無に話しかけられた

「ん、なんだ？」

「明日は暇？」

明日か、うーん明日ねえ

「特に用事はないが」

「じゃあ、デートに行きましょう！」

「はあ、どこに行く気だ？」

コイツの事だから知らないで行くのは危険だ

「えーと、服を買って、後は遊園地に行きましょう」

「意外とまとだったな」

「だって折角の休日で仕事が無いんだから、楽しみたいじゃない」

俺ら生徒会は休日でも、書類の整理などをしている

・・・本音だけは居ないが、

本音の姉の虚さんいわく、居ないほうが作業が進む、だそうだが、まあ、あの性格だとね・・・

「まあ、別にいいけど」

「ほんとに？」

「ああ、本当だ」

「ふう、良かった」

「なんだ？断られると思ってたか？」

「う、まあ、それは、ね」

「まあ、俺も久しぶりの休日でも一人つても寂しいからな」

一夏は、えーと、弾だったか。そいつの家に行くって言うてたし
かと言って他に誘う奴も居ないし

「それじゃあ、駅前で買い物してから遊園地でいいか？」

遊園地は少し遠いから電車を使って移動しないと駄目だから
時間を考えるとその方がいいだろう

「ええ、じゃあ八時に駅前に集合ね」

「なんでだ？同じ寮で同じ部屋だろ？」

「もう、分かってないわね」

ああ、雰囲気とかそういう系か

「ああ分かった分かった。」

「なら良いけど。じゃあ、今日は寝ましよう」

確かに遅れると悪いからな

「ああ、そうしようか」

.....

つて事があつたから
で、今その駅前では、

『いいじゃん、俺らとどこか行こつぜ？』

「すいませんが、人を待ってるんで」

楯無がナンパされていた
つてことで、やることは決まっ
ていて・・・

『そんなやつ、ぐはっ！』

助けるのがお約束だろ？

「いやー、いい度胸してますね。人の連れに何してくれてんですか？」

『この野郎！』

『死ねえ！』

「ああ、共通の言語を持ってないのか。猿か、あんたは？」

そして数分後

『う、ごめんなさい』

『す、すいません』

「ああ、なんて言ってるの？日本語で話してくれない？」

ゴキユッ！

『ああー！？』『』

はい、ゴミの片付けしゅーりょー！

「さあ行こうぜ、楯無」

「ええ、分かったわ」

.....

ここは駅前のショッピングモール【レゾナント】

で、今俺達は服を選んでいる

「どっちがいいと思う?」

楯無が出したのは、黒のワンピースと水色のワンピース

「やっぱり楯無には水色じゃないか?」

「うん、じゃあそっちにする」

で、服を選びえてから

「他には何か買うものは?」

「えっと、後はブランケットを」

ブランケットってあのひざ掛け位の毛布みたいなのだった気がする

「何に使うんだ?」

「何って、暖まるのに使うのよ」

まあ、確かにそりゃそうだな

「まあ、早いところ買おうぜ」

遊園地に行く前に少し飯を食って置きたい

「じゃあ、これにするわ」

「ちょっとでかくないか？」

楯無が持ってきたのは、普通の毛布ほどじゃないけどかなり大きめのものだった

「こういうのは大きめの方がいいのよ」

「そうか、まあいいんだけど」

「それじゃあ、早く行きましょう」

「ああ、分かったよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして会計を終えて、今は昼食を食べに来ている

その店は結構高い店だが、金は有るから大丈夫だろう

「じゃあ、私はナポリタンとミルクティーで」

「俺はカルボナーラとアイステイーをお願いします」

『かしこまりました』

「そういえば今度の学年別トーナメントだけどやっぱりタッグ戦になると思っわ」

「そうか、それで俺は結局どうなるんだ？」

俺も一応副会長だからそういう情報は回ってくるんだがお前が出たら絶対優勝じゃない？ってことで出られるかどうか分からないかった

「えーとね、来斗と私は出たら試合にならないから、教師と一緒にピットで試合を見てる事になったわ」

「そうか、まあ仕方が無いな」

『お待たせしました』

と話してると料理が届いた

で、今度は・・・

「はい、アーン」

「あ、あーん」

楯無にはいあーんをされている
だっしょうがないじゃん！楯無が左の指をワキワキさせてるんだもん

「来斗のも一口頂戴」

「あ、ああ、あーん」

「あーん。うん、おいしい」

凄い疲れた、いや悪い気はしないけどさ

・・・・・・・・・・・・・・・・

でさらに場所は移り遊園地

荷物を入り口で預かってもらい

遊びに行くところで再び問題が発生

「おい、離れて歩けよ」

「カップルは腕を組んで歩くものよ」

「まだカップルじゃねえだろ」

それに腕を組むときに自然にその、胸がね
楯無って標準よりもあるからその、嬉しい感覚が腕に・・・

「ふふふ、どうしたの？顔が赤いわよ？」

しまったあ！はめられたあ！

「なんでもない、さっさと行くぞ」

「はいはい」

それですはジェットコースター

「ね、ねえ、これはやめとかない？」

ほう、う、めずらしいな、楯無が慌ててるぞ

「駄目だね、もう後ろに結構並んでるし」

「うう、来斗のいじわる」

「大丈夫だって、ほんの数秒だから。ほらほら、さっさと乗るぞ」

「・・・分かったわよ」

とうとう観念したか

ガタンッ！

ロックの外れる音が聞こえてコースターが動き出す

まずはお約束の上りから始まる、が

その上りの高さがハンパじゃない、上を見上げると首が痛くなる。

隣の楯無は相当怖いみたいで、俺の腕にしがみついてふるえている

そして頂点に達すると同時に・・・

ガコンッ！

かなりの高さから九十度近く of 角度で落ちる

「きゃあああああああああ!!!!」

「うおおおっ!!」

凄いGが体にかかる
隣の楯無は

「・・・・・・・・・・・・・・・・（チーン）」

あ、ヤバイ死んでる

そして無事終わった

「もう、許さないんだから」

「ごめんごめん。あそこまでとは思わなかったんだって」

「次はまったりしたやつにしましょう」

そういつて楯無が指差すのはコーヒークップ

「わかったが、あんまり早く回すなよ?」

「分かってるわよ」

そして乗ると、やはり

ギュワアアアア!

「止めろおお！楯無！」

ものすごい速さでカップを回す楯無、
コイツ高いのは駄目なくせに回転するのは大丈夫なのかよ

「ふふふ、さっきのお返しよ」

その後はフリーフォールなどを乗った後、観覧車に乗っている
そういえば、恋人の相性を見る奴で百パーセントになったなあ
観覧車で景色を見ていると、楯無が話し始めた

「ねえ、来斗」

「ん？なんだ？」

チュッ

話しかけられたので、振り向いたら楯無にキスをされた

「今日は楽しかったわ、ありがとう」

「まったく、お前はそんなにキスするって、俺のことが好きなのか
？」

「え？そうだけど、知らなかったの？」

「しらねえよ！ってことは何だ？」

俺はずっと片思いだと思ってたら両思いだったと？」

「え？来斗は私の事好きだったの？」

「いや、好きじゃない奴にキスされたら怒るだろ？」

「じゃあ、もちろん付き合ってくれるわよね？」

「それは喜んでうけるが、良いのか？」

「良いって何が？」

「俺は、転生者だし、俺と居たら危ないかもしれないぞ？」

「そんなの聞くまでもないわ、それに危ない時は助けってくれるんでしょう？」

「ふふ、分かったよ、楯無」

「それじゃあ、もう遠慮しなくて良いのね」

「え？何をだ？」

「こついつこと」

ガバッ

楯無が俺に抱きついてきた

「おいおい、キスとかしてたんだからそれくらい普通じゃないか？」

「いえ、ほんとはもつとやりたいけど、もう下に着くから」

気がつくとも既に観覧車はかなり下の所まで来ていた

「そうか、それじゃあ、帰ろうか？」

「ええ、門限に遅れたら大変だしね」

・・・・・・・・・・・・・・・・

その日の夜の自室

「そういえば来斗。このブランケット、こうする為に買ったのよ」

楯無は自分がブランケットを羽織ったまま、俺もブランケットで包み、

その中で抱きついてきた

「そうか、あったかいな。でもな、

楯無、そろそろ歯止めが利かなくなってきたんだが」

今の楯無の姿は下着だけで、腕を組んだときよりもダイレクトに柔らかさが伝わってくる

「ふふ、でももう我慢しなくてもいいのよ？」

「いいのか？」

「ええ、と言うよりももっと前に襲ってもらおうと思ってたんだから」

「そうか、分かった。でも今夜は寝かさないぜ？」

「でも初めてだから、優しくして、ね？」

「わかんないけど、努力はする」

詳しくは書けないが、次の日には買ったばかりのブランケットに血と白濁が着いていて、二人が抱き合っていた

.....

楯無サイド

やっと来斗と一緒にすることが出来た、でも来斗も私が好きなんだったらもっと前に告白すればよかった夜の時は最初は痛かったけど、凄い嬉しかったなそれに凄い激しかったな。

.....もう離さないからね、来斗

休日と告白（後書き）

はあ、テストで書けなかった分が今回で出ましたね
いきなり何書いてるんだろ、おれ

二人の転校生（前書き）

今回もちょっとやりすぎたかな？
まあ、大丈夫ですかね？

二人の転校生

「ふああ、ふう」

いつものように目を覚まし、伸びをする

いつもと違うのは、隣の楯無と俺が一切何も纏っていない事だろう
昨日の夜、コイツを抱いてから事が落ち着いたのは早朝5時で
少しだけ仮眠を取ることにしたのだ

そして現在6時30分、登校まではまだまだ時間があるが楯無を起
こす

「おい、たてなし、おきろ」

「う、ん？来斗？」

「もう朝だぞ、早く起きろ」

「うん、分かった」

良かった、いつもより遅く寝たから起こすのに苦勞するかと思った

「ねえ、来斗？」

「ん？なんだ？」

「責任取ってくれるんだよね？」

ああ、その事か。確かにあそこまでしたからな

「ああ、安心しろ。ずっと一緒に居てやる」

「うん、ありがとう」

そういつて抱きついてくる。

俺は抱きしめ返して、優しいキスをする

「来斗、大好き」

「ああ、俺もだよ」

コンコン！

「おい、来斗」

その時、部屋をノックされたのだが、

その時俺は楯無に夢中で聞こえなかった、楯無も同じく・・・

「おい、入るぞ！」

そういつて入ってくる一夏

その視線の先には抱きしめ合ってキスをする俺と楯無

「あ、あれ？」

「え？ええ！？」

「おい、一夏いい度胸してるな！」

上から一夏、楯無、俺だ

「死ねえ！一夏あ！」

ナイフを持ち、一夏に切りかかる

「おい！？止めろって！」

「問答無用！」

「ちゃんとノックしただろ！？」

「少しは察しろよ！」

「騒がしいぞ！何の騒ぎだ？」

言い争っていると、隣の部屋だった筈が入ってきた
そして俺は楯無にアイコンタクトをする

『楯無、筈を一夏にぶつけろ、俺が襲われそうになったとでも言え
ばいい』

『了解』

そして楯無が筈に耳打ちする、するとどんどん筈の顔が赤く染まっ
ていく

「おのれ一夏あ！やはりそっちの趣味があつたのか！？」

「な！？筈！」

「死ねえ！」

「止める！」

結局この騒ぎは織斑先生が来るまで続いた、そして帰り際に

「そういう事をするならほどほどにしろよ。」

見回りが昨日は私だったから良かったが、外に声が聞こえていたぞと言われた

声か、うかつだったな。

あんまり注意してなかったぜ

.....

んで今は食堂に楯無と飯を食いに来ている
すると何人かの女子が話しかけてきた

『あ、あの、二人は付き合ってるんですか？』

『昨日、来斗君と先輩の部屋から、危ない声が聞こえたんですけど』

やっぱり聞いてた人がいたか、寮のトイレは各階の端に有るから
人が何人か通ったかもしれないと思ったけど

「いや、そんなことは・・・」

あんまり広めると楯無嫌がるかな・・・

「そうよ、私達は付き合ってるのよ」

つてええ!?

「おい!楯無!?!言つて良いのかよ!?!」

「あら?知らなかったの?私独占欲が強いなの?」

そういつてキスをしてくる楯無
するとそれを合図のように

『『『きゃあああ!!!』』』

うわ、うるさッ!

しかも喜んでる奴も居れば、めっちゃ沈んでる奴も居る
まったく朝から元気な奴らだ、まあ俺も人のこと言えないけど

「まったくお前は、まあそんなお前に惚れたんだけどな」

「ふふ、私もよ」

周囲に桃色の空間が・・・

『あ、あの』

『お邪魔みたいなので』

『失礼します』

耐え切れなかったか

俺も目の前でこんなイチャイチャされると逃げたくなるしな

・・・・・・・・・・・・・・・・

はい、無事？朝食を食べ終えた今教室

さっき聞かれたことがもう広がってるみたいで質問攻めにあつた

しかし織斑先生の一喝により着席、無事に生き延びることが出来た

「では山田先生、HRを」

「は、はい！ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二人です！」

「へえー」

『『『ええええええッ！！？？』』』

いきなり転校生が来たとの事で、一気にクラスが騒がしくなる。
まあ、気持ちは分かるが

「失礼します」

「・・・・・・・・・・」

そして教室に入ってきた二人をみてざわめきが止まる。
なぜなら、そのうちの一人が――男子だったから。

二人の転校生（後書き）

転校生の話なのに終盤しか出せませんでした・・・
次話はシャルとラウラが登場します

それにしてもまだテスト後の影響が抜けません・・・
零式は出来れば明日か明後日辺りに出します

銀髪軍人と金髪貴公子（前書き）

・・・ほんとになにかいているんだろっぼくは・・・

銀髪軍人と金髪貴公子

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。
この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお
願います」

転校生の一人、シャルルがにこやかな顔でそう告げて一礼する。
俺以外の奴らは皆あつけにとられていた

『お、男？・・・』

いや、たしか女です

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を
・・・」

んん、まあ、知らなければ男に見えないことも無いな
男の娘つてところかな

『きゃ・・・』

ふ、今回は抜かりないぜ、この耳栓がある
これを装着すれば声なんて・・・

『きゃあああああーーーーーっ！』

なっ！？耳栓も効果が無いというのか！？

『男子！三人目の男子！』

『しかもうちのクラス！』

『美形！守ってあげたくなる系の！』

『地球に生まれて良かった~~~~~！』

まったく、元気なことで、俺は昨日のk、ゲフンゲフン！
これは思い出さないようにしよう。息子が起きてしまう

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

もう鬱陶しいんだろうな、織斑先生って割りと分かりやすいよね

「皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

あれえ？山田先生、居たんですか？気がつかなかった

ていうか、普通の奴だったらあんな盛り上がりの後だとやりづらい
だろうに

・・・今回の人は普通じゃないですけど。
だって・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

いまだに口を開かないんだぜ、普通じゃあないね

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

ああ、やっぱりその呼び方なんだ。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、
ここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

めんどくさい奴だな

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

まったく、これが一夏に惚れるんだもんな。
世の中分らんことばかりだ

「あ、あの、以上ですか？」

「以上だ」

空気に耐え切れなくなった山田先生がラウラに聞くが、即答される
凄い泣きそうになつとるぞ
つとヤバイ、そろそろあのイベントだ。ここはぶっ壊したかったんだ

「！貴様が――」

よし、いくぜ！

バシッ！

「貴様！邪魔をするな！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は黙って手を握る力を強める

俺の力だと、コンクリでも簡単に碎けるから力は抜いている
まあ、抜いていてもかなりの痛みだろうがな

「いい加減にしろ！」

とうとうキレたラウラがナイフを抜き、構える

そしてそれで切りつけてくるが、俺は迷うことなくナイフの刃を握る

「どうした？そんなもんか？俺だったら指一本で倒せるぜ」

喋っている間も俺の手を伝って血が垂れる

「ふん、できるものならやってみろ」

お、言ったねー、こいつ

「じゃあ、お言葉に甘えて」

俺は中指を親指で押さえる、いわゆるデコピンの構えを取る

「もう一度だけチャンスをやろ」

「出来るものならやってみろ」

あーあ、最後のチャンスだったのに

「皆さん、証言は取りましたよ。
じゃあ・・・死ね！」

思いっきり引き絞った指をラウラのデコに当てると同時に、

ドゴッ！

壁に思いっきり叩きつけられるラウラ、まあ手加減はしたよ。
本気でやったらぶつとぶ所か、頭が無くなる

「がはっ！」

「忠告はしたぜ、黒ウサギさん」

バシンッ！

「何をしている！」

「いやいや、あいつが一夏を殴るのを止めたら、ナイフなんて出してきたんですから

正当防衛でしょ？そもそも俺は指一本でやったんですから、まだましですよ。

グーで殴ったらあいつの体が消し飛びますよ。」

「限度を考えろ！もっとやり方があっただろう」

「だから指一本でかなり手加減してあれなんですって！
デコピンで本気だったら壁を突き抜けてますよ」

「もういい！ラウラも席に戻れ！」

「はい」

いつの間にか復活したラウラが席に戻る

「まあ、いいや」

俺も席に戻る

「いろいろ騒ぎがあつたがこれでHRを終わる。

神杉は保健室に行ってからアリーナに來い、以上だ!」

.....

『まったく、気をつけなさいよ、ナイフを手で握るなんて何を考
えるの?』

俺はいま、保健室で保険の先生に説教されている

『それにデコピンで壁までぶっ飛ばすなんてどんな体してるの?』

神に貰いました、なんて言えない

「鍛えたらできるようになりました」

『はあ、もういいわ。さっさと授業に戻りなさい』

「了解です」

.....

そして俺は第二アリーナに急いで移動したのだが・・・

「おい、神杉。今から生徒会室に行って来い。更織の奴が呼んでいた、

おそらくこの授業中は戻れないだろうから、午後の座学には出席しろよ」

「あれ？止めないんですか？」

普通なら止めるのに

「お前ならあいつが一回言い出したら止めないのは知ってるだろう？それにこの学園の生徒会長は教師よりも権限が大きいんだ。あいつに命令できるのは理事長ぐらいだろう」

「どうもすいません」

「いや、去年からだからな、もう慣れたよ。そんな事より早く行って来い」

「はい、分かりました」

・・・・・・・・・・・・・・・・

場所はさらに変わり生徒会室

・・・あれ？俺移動してばかりじゃね？

まあ、そこは置いといて

「なんだ？楯無」

「えつとね、ちょっと合いたくなつたから」

「はあ、まあいいや。少しはなしがある。

うちのクラスの転校生、ありやどついう事だ？お前なら知ってる？」

「シャルル・デュノアの事ね？」

「いや、シャルロット・デュノアのことだ。何で男装なんてしてたんだ？

まあ、実家がデュノア社つてのを考えると大体は分かるが」

「来斗つて本当に情報が早いのね。そこまで知ってるつて。

まあ、きっと広告塔が一夏くと来斗に近寄るためでしょうね」

「やっぱりか、まあ聞きたかつたのはそれだけだ」

「じゃあ、さ、いい？」

何を言い出すんだ。コイツは

「駄目だ、夜まで待て」

「うっ、我慢できないよ」

このやろっ、前よりも対処が大変になつてきた

「空腹は最高のスパイスってな」

「・・・来斗の意地悪」

「今はこれだけで我慢しろ。授業中に来てるんだから今は無理だ」

俺は楯無を抱きしめてキスをする。

俺はすぐ離れるつもりだったのに楯無に顔を抑えられ、舌を入れられる

「・・・んう・・・くちゅ・・・ん・・・はぁ・・・」

そしてぴちゃぴちゃと音を立てて、深い方のキスをする

「はぁ、はぁ・・・なんだよ、そんなにやりたいのかよ？」

「・・・うん」

もう、今のキスのせいで理性が振り切れそうだ

「まったく、エロイお嬢様だな」

「来斗のせいだからね。こんな風にした責任取ってよ？」

「・・・それ前もしなかったか？」

「今回は婚約よ」

そういつて色っぽく微笑む楯無

「ああ、誓うよ。大好きだ、楯無」

「・・・うん、私も。もう離さないからね」

「こっちの台詞だよ」

そして今度は、普通の触れるだけのキスをする

そして二人の行為が終わる頃には昼になっていた
生徒会室が教室から離れていたのが不幸中の幸いだろう

銀髪軍人と金髪貴公子（後書き）

生徒会長の権限については部屋を変えられるんだから、
教師よりも権限は大きいだろうなーと

そして次こそは普通の話を書きたいなと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657x/>

I S 転生の翼

2011年11月30日00時57分発行